



一般国道23号 中勢道路

埋蔵文化財発掘調査概報19

2007.9

三重県埋蔵文化財センター



木造赤坂遺跡第7-2次調査②地区・井手ノ上遺跡全景(上空北から)



須恵器両耳付平底壺

例 言

1 本書は、三重県が国土交通省中部地方整備局から委託を受けた一般国道23号中勢道路建設予定地にかかる平成18年度の埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2 調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の負担による。

3 調査の体制は下記のとおりである。

・調査主体 三重県教育委員会

・調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅱ課

課 長 田村陽一

主 査 上村安生 大塚匡基

主 事 浅尾 太 石井康晴

技 師 岡田 実 原田恵理子 水谷 豊 角正芳浩

臨時技術補助員 才木 薫 豊田祥三

室内 整理 員 黒川敬子 太田浩子 森川絹代 山口香代 北岡佳代子

西山実公子 野田摩耶 堀さや子 浜崎佳代 中西千鶴

・土工作业受託機関 株式会社島田組 安西工業株式会社

有限会社中浦土木 技建志登茂有限会社

4 調査期間中には、下記の方々へ専門的なご指導とご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同敬称略)

八賀 晋 (三重大学名誉教授) 外山秀一 (皇學館大学教授)

城ヶ谷和広 (財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター)

5 本書作成にかかる整理及び報文執筆は、主として各遺跡の現場担当者によるが、執筆分担は目次に記した。

6 本書に用いた地図及び遺構実測図は、世界測地系による国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。

7 本書では、土層の色調については小山・竹山編『新版標準土色帖』(22版1999年)を使用した。

8 本書に用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

S B : 掘立柱建物 S D : 溝・自然流路 S E : 井戸 S R : 道路状遺構
S H : 竪穴住居 S K : 土坑 S Z : 埋設土器 P i t : 柱穴・小穴

目 次

例 言

目 次

I 前 言	(土村) 1
1 中勢道路と埋蔵文化財保護	1
2 平成18年度の現地調査	1
3 平成18年度の整理作業と報告書作成	1
4 公開普及	1
5 発掘調査体制の変更	1
II 木造赤坂遺跡・井手ノ上遺跡	6
1 はじめに	(才木) 6
2 木造赤坂遺跡第7-1次調査	(石井・角正・才木) 7
3 木造赤坂遺跡第7-2次調査①地区	(淺尾・豊田) 13
4 木造赤坂遺跡第7-2次調査②地区・井手ノ上遺跡第2次調査	(才木・豊田) 15
5 まとめ	(角正・才木・豊田) 24
III 向山遺跡	(水谷) 25
1 はじめに	25
2 調査概要・結果	25
IV 成瀬A遺跡・成瀬B遺跡・稲降遺跡	(原田) 26
1 はじめに	26
2 成瀬A遺跡	26
3 成瀬B遺跡	26
4 稲降遺跡	26

挿 図 目 次

I 前 言

第1図	中勢道路（8工区内）遺跡位置図	5
第2図	中勢道路（13・14工区内）遺跡位置図	5

II 木造赤坂遺跡・井手ノ上遺跡

第3図	調査区位置図	6
第4図	第7-1次調査⑥地区道路状遺構模式図	8
第5図	第7-1次調査出土遺物実測図	10
第6図	第7-1次調査遺構平面図	11~12
第7図	第7-2次調査①地区遺構平面図	13
第8図	第7-2次調査①地区出土遺物実測図	14
第9図	第7-2次調査②地区・井手ノ上遺跡遺構平面図	16
第10図	第7-2次調査②地区出土遺物実測図1	19
第11図	第7-2次調査②地区出土遺物実測図2	20
第12図	第7-2次調査②地区出土遺物実測図3	21
第13図	第7-2次調査②地区出土遺物実測図4	22
第14図	第7-2次調査②地区出土遺物実測図5	23

III 向山遺跡

第15図	向山遺跡トレンチ位置図	25
第16図	F1・F2トレンチ平面図・土層断面図	25

IV 成瀬A遺跡・成瀬B遺跡・稲降遺跡

第17図	成瀬A遺跡・成瀬B遺跡・稲降遺跡調査区位置図	26
------	------------------------	----

表 目 次

I 前 言

第1表	中勢道路発掘調査成果	2~4
第2表	平成18年度中勢道路発掘調査遺跡	4

I 前 言

1 中勢道路と埋蔵文化財保護

中勢道路は、三重県中勢地域の道路網を充実させるとともに、交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用を図り、地域の経済発展に寄与するために、一般国道23号のバイパスとして計画された鈴鹿市玉垣町から松阪市小津町までの延長33.8kmの道路である。当事業地内における埋蔵文化財の保護取り扱いについての協議は昭和58年から行われているが、その詳細については既刊の各概報に詳細に記載されているので参照されたい。

2 平成18年度の現地調査

平成18年度の埋蔵文化財発掘調査委託契約は、国土交通省中部地方整備局長と三重県知事との間で4月3日に締結した。契約期間は平成18年4月1日から19年3月31日である。

本年度の調査の工程や具体的方法については、4月20日に国土交通省三重河川国道事務所と三重県埋蔵文化財センターで協議を行った。この協議では平成19年度に木造赤坂遺跡南端部の前田川沿いで工事着工の予定があるため、その進入路にあたる部分の調査を今年度実施してほしい旨の申し入れがあった。これをうけて、当初は19年度に予定していた調査箇所の一部を第7-2次調査①地区として実施した。その後も同様の協議を7月、12月、19年1月にも行い、発掘調査業務の円滑な推進を図った。

木造赤坂遺跡については昨年度の第6次調査より北側の部分と昨年度農道のため未調査であった部分の一部を含めて第7-1次調査、南側の部分を第7-2次調査として実施した。特に第7-2次調査では竪穴住居をはじめとする多くの遺構が確認され、朝鮮半島とも結びつきの深い土器も出土した。遺構密度が高かったため、埋め戻しまでのすべての調査が終了したのは19年3月中旬であった。なお、これまで赤坂遺跡としてきた遺跡名称については、市町村合併により津市内に同じ名称の遺跡が存在することになったため、今後は木造赤坂遺跡とする。

当初、昨年度に予定され、用地買収の関係から延期されていた成瀬A遺跡・成瀬B遺跡・稲降遺跡の調査は11月中旬から下旬まで実施した。さらに昨年に引き続き、用地買収の進捗により、向山遺跡の調査を10月中旬に実施した。

3 平成18年度の整理作業と報告書作成

整理作業については、過年度に現地調査を実施した替田遺跡、中林・中道遺跡、里前遺跡等の資料整理を鋭意行った。また、小津遺跡、舞出北遺跡(上層)の報告書を作成、刊行した。

4 公開普及

発掘調査に伴う公開普及活動としては、地元小学校の子どもたちの現地学習、現地説明会、調査ニュースの発行などを行った。

現地説明会は木造赤坂遺跡で12月に実施した。今年度は天候にも恵まれ約130名の参加者があり、出土した遺物を間近で見させていただくことが出来た。

『中勢道路調査ニュース』は18年12月に今年度の木造赤坂遺跡第7-1次調査の成果を中心にNo.46を発行し、19年3月に木造赤坂遺跡第7-2次調査の成果を中心にNo.47を発行した。

5 発掘調査体制の変更

昭和63年の中勢道路の発掘調査開始以来行われてきた三者体制(国土交通省が土工部門以外の委託契約を三重県と結び、土工部門については社団法人中部建設協会と結び、国・県・協会の三者で協定を結ぶ体制)について平成18年度より見直しをはかり、土工部門についても三重県に委託された。そのため、調査方法の検討を行い、土工委託方式で民間発掘会社の導入をはかり、今年度の調査を行った。今後も継続される予定である。

工区	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	S 63	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	
00	稲荷遺跡	松原市	770												770							
01	松木遺跡	松原市	31,000	2,990	1,470										1,470	3,410						
02	藤島遺跡	松原市	31,500	1,130	0										1,130		540					
03	中林・中道遺跡	松原市	18,000	1,010											1,010	1,040	5,240	2,190				
04	巨・長原遺跡	松原市	1,470	8,470											1,190	280	3,780	7,100				
04	巨・東道遺跡	松原市	11,220	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5,300	6,730	11,100	0	0	0	0	0
合計			84,300	30,517	2,540	324	3,947	96	748	1,024	678	2,010	0	8,460	0	8,450	9,560	18,100	14,580	20,370	11,870	

(注)左方については、※1：駒原市教育委員会家屋 ※2：津市教育委員会家屋 ※3：松原市（個別町）教育委員会家屋

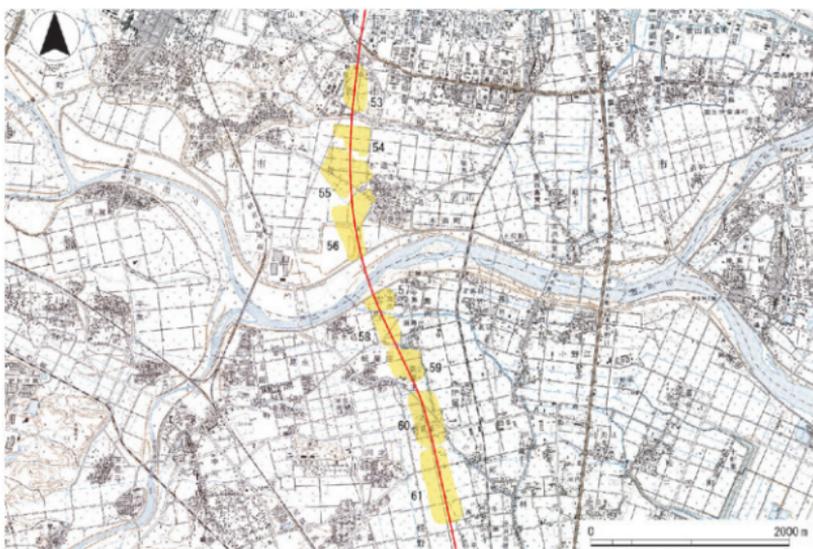
第1表 中勢道路発掘調査成果

工区	番号	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	担当者	備考
8	15	成瀬A遺跡	津市河雲町三行	600㎡	平成18年11月13日 ～平成18年11月28日	原田恵理子 石井謙晴	
	16	成瀬B遺跡	津市河雲町三行	140㎡	平成18年11月13日 ～平成18年11月28日		
17		稲降遺跡	津市河雲町北黒田	260㎡	平成18年11月13日 ～平成18年11月28日	上村安生 原田恵理子 水谷豊	
	53	向山遺跡	津市 高茶屋小森町	400㎡	平成18年10月16日 ～平成18年10月20日		
13	55	水道赤坂遺跡	津市水道町	11,500㎡	平成18年5月17日 ～平成19年3月12日	浅尾 太 石井謙晴 水谷 豊 才木 薫 豊田祥三	12月16日現地説明会 参加者130名
	56	井手ノ上遺跡	津市水道町	370㎡	平成18年5月17日 ～平成19年3月12日	浅尾 太 水谷 豊 豊田祥三	
合計				13,270㎡			

第2表 平成18年度中勢道路発掘調査遺跡



第1図 中勢道路(8工区内)遺跡位置図(1:50,000) (国土地理院1:25,000『白子』から)



第2図 中勢道路(13・14工区内)遺跡位置図(1:50,000)

(国土地理院1:25,000『津東部』『津西部』『松阪港』『大仰』から)

II 木造赤坂遺跡・井手ノ上遺跡

1 はじめに

木造赤坂遺跡・井手ノ上遺跡は、津市木造町(旧久居市木造町)に所在する。三重・奈良県境の高見山系を水源地とする雲出川左岸の標高6.0～7.0mの低位段丘、及びその南の標高5.0mの沖積低地にかけて立地し、現況は水田及び畑地である。

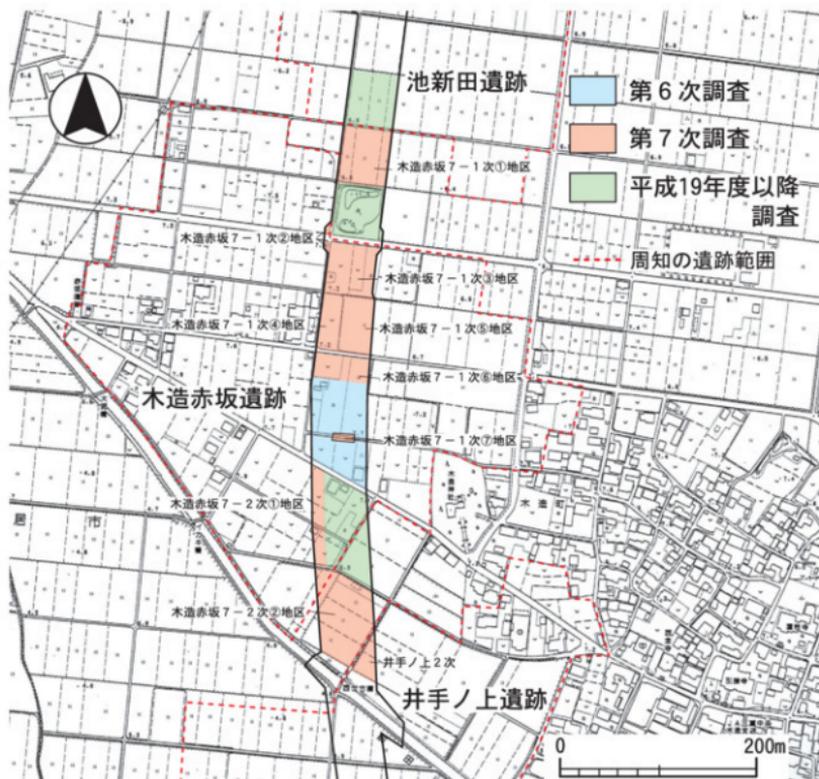
平成17年度に実施した木造赤坂遺跡第6次調査では、古墳時代～近世に至る多くの遺構を確認した⁵⁾。

今年度の第7次調査は、第6次調査区の北側を第

7-1次①～⑥地区、南側を第7-2次①・②地区として行った。また、第6次調査で調査の対象外とした農道部分について、南北方向の溝SD117の接続を確認する為、追加調査を実施した(第7-1次⑦地区)。調査面積は、計11,500㎡である。

井手ノ上遺跡は、木造赤坂遺跡の南側に隣接する。平成16年度に実施した第1次調査の結果を受けて、370㎡を対象に第2次調査を行った。

以下、地区ごとに調査成果を概観する。



第3図 調査区位置図(1:5,000)

2 木造赤坂遺跡第7-1次調査

a 基本層序

調査区の基本層序は、上層から表土(耕作土)、灰黄褐色砂質土～シルト層(包含層)、黒褐色シルト～粘質土層(いわゆる黒ボク)、黄褐色シルト～粘質土層となる。遺構検出は、黄褐色シルト～粘質土層上面で行った。④地区北西部から⑥地区南東部にかけては黒褐色粘質土層下に埋没する小規模な谷状地形が存在しており、この辺りは古代から水はけの悪い土地条件であったと想定できる。現在でも④・⑤地区は水田として利用されていたため削平が著しく、遺構検出面の高さも周辺に比べて30～40cm低い。

b 遺構(第6図)

飛鳥・奈良時代

竪穴住居5棟、掘立柱建物3棟、溝1条がある。

竪穴住居と掘立柱建物は③地区と⑥地区で確認した。この両調査区の間④・⑤地区では確認されなかったが、この調査区は前述のように著しく削平を受けていることから、遺構の多くがすでに破壊されている可能性も考えられる。こうした場合、第6次調査で確認された集落域の北限は③地区となる。

SD233(写真4)は前述の谷状地形とほぼ同位置に掘削された溝で、断面形状は上部が逆台形、下部が箱型である。埋土上層から、須恵器・土師器裏などが出土した。

中世前期

道路状遺構、土坑、溝、井戸を検出した。

第6次調査で確認されたSD108は、その形状から道路状遺構である可能性を指摘されていたが、今調査ではその続きを確認し、その結果、道路状遺構であることが明らかになった。SD108は、側溝・波板状凹凸遺構(以下、波板と記述する)・路盤など全てを総称した遺構名であったため、今回の調査では時期別にSR108・266と改称し、側溝等の道路を構成するそれぞれの遺構にも新たに遺構名を付した。

SR266(第4図・写真1) SD238・239(第6次調査SD108西・東側溝)を側溝とする道路状遺構で、道路幅は溝芯々間で約1.8mである。SD238は、⑥地区北部で削平により消滅している。道路内には不整形の小ピット群(=波板D)が存在する。波板状凹凸遺構の形成についてはさまざまな意見があるが⁹⁾、波板Dの場合、断面形状・埋土の状況から意図的に構築されたものとは考えにくく、この辺りが水はけ

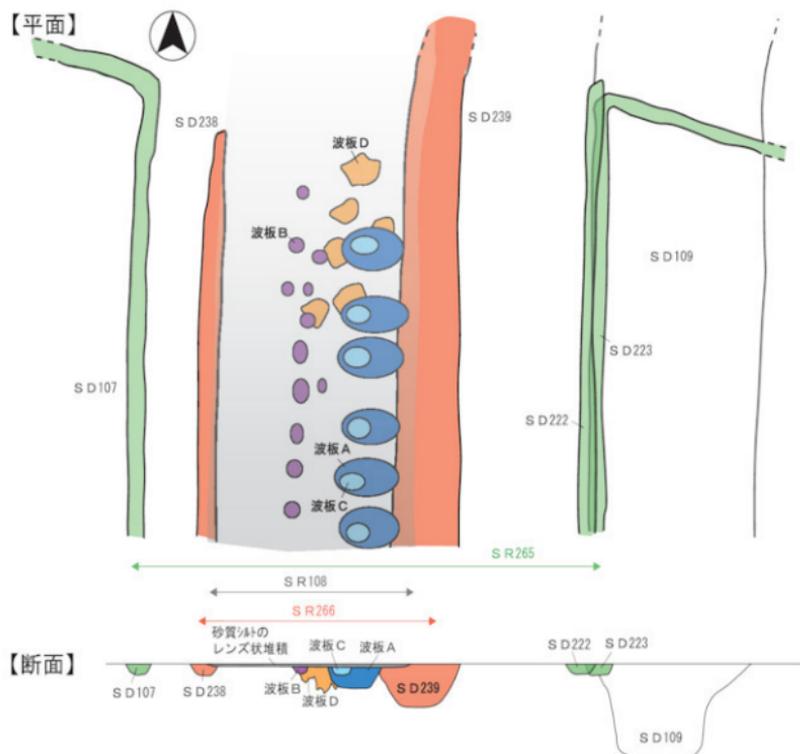


写真1 道路状遺構(南から)

の悪い土地条件であったことを考慮すれば、ぬか
みを人が歩いた際にできた痕跡などが可能性として
挙げられる。

SR108（第4図・写真1）SR266に重複して敷設
された道路状遺構である。⑥地区北部で、削平によ
り途切れる。道路使用当時の表面である硬化面は
削平されており、最上層には路盤に相当する硬く
締まった吸水性の非常に高い砂質シルトが、レン
ズ状に薄く数枚堆積していた。その下部で波板A
～Cを検出した。波板A（写真3）は、長軸約0.9m、
短軸約0.5mの楕円形ピット列で、底には拳大の礫
と、同程度の大きさに打ち欠いた山茶碗が敷かれて

おり、SD239埋没後に造られている。波板Aの西
側には、これに沿うように径20cm程度の小ピット列
（＝波板B）が存在する。また、波板Aと重複して径
30cmの小ピット列（＝波板C）が形成されている。こ
れらの波板は、全て硬く締まった吸水性の非常に高
い砂質シルトで充填されていた。こうした特徴をも
ったこれらの波板は、前代で著しく傷んだ道路SR
266（波板Dから想定される）を改修する際に、軟
弱地盤を補強するために構築された路盤であると同
時に、道路地下に造られた暗渠としての役割も担っ
ていたと考えられる。また、波板A・Cには重複関
係が見られることから、SR108には少なくとも二



第4図 第7-1次調査⑥地区道路状遺構模式図

時期あることが窺える。

S D 241 ⑤地区東端で確認された溝で、L字状に折れ曲がり、それぞれ調査区外北・東方向へと続く。明治年間の地籍図では、この溝の東側に約38×45mほどの方形の地割が存在している。おそらくこの溝は、この方形空間を区画していたものであろう。山茶碗・土師器鍋などが出土した。

S D 353 ~ 355-365 ①地区で検出した北西-南東方向の幅1.0mほどの溝で、このうちS D 354からは多くの山茶碗が出土した。中には、底部外面に墨書されたものが数点ある。

S D 368 ①地区中央部分で検出した東西方向の溝である。幅1.5mと1.0m以上の2条の溝が重複しており、1度再掘削されたことがわかる。平安時代後期～鎌倉時代初頃の遺物が出土した。

井戸は、11基検出された。大半は素掘りで井戸枠に相当する構造物は確認されていないが、掘形が楕円状を呈するものもあり、廃棄時にそうした構造物が抜き取られた可能性も考えられる。このうちS E 367には底に水溜め用の曲物が遺存しており、山茶碗とともに下駄が出土した。

中世後期

道路状遺構を確認した。

S R 265 (第4図・写真1) S R 108に重複して敷設されたもので、S D 107・222・223を側溝とする。⑥地区北部で西側溝のS D 107は北西方向に、東側溝のS D 223は南東方向に屈曲して延びており、道路はここで北西-南東方向のものに接続し、丁字路となる。道路幅は溝芯々間で約4.7mであるが、接続部分では拡幅している。路面にあたる硬化面は削平されている。出土遺物は少ないが、山茶碗などとともに15～16世紀代のもも含まれており、中世後期まで存続していたことが窺える。

S R 267 ④地区で確認したS D 257・264を側溝とする道路状遺構で、道路幅は溝芯々間で約4.3mである。S D 264の西側には、S R 266波板D埋土と同質の土で埋まったS D 258が検出された。また、側溝間には配列に規則性を見いだせない小ピットが多く検出されているが、これらのピット群とS D 258の性格は明確にはしがたい。この道路は、鎌倉時代初頃には埋没したと考えられるS E 259に重複して敷

設されている。また明治年間の地籍図には、幅6mほどの細長い地割がここに存在しており、この道路の存続期間は鎌倉時代前期以降から近世までと考えられる。出土遺物は少ないが、中世の陶器が出土した。

c 出土遺物(第5図)

飛鳥・奈良時代から中世の遺物が大半を占めるが、⑥地区の北東部で近世の遺物も少量出土した。

飛鳥・奈良時代

主に③や⑥地区の堅穴住居跡から須恵器杯身・杯蓋、土師器杯・皿・甕などが出土した。

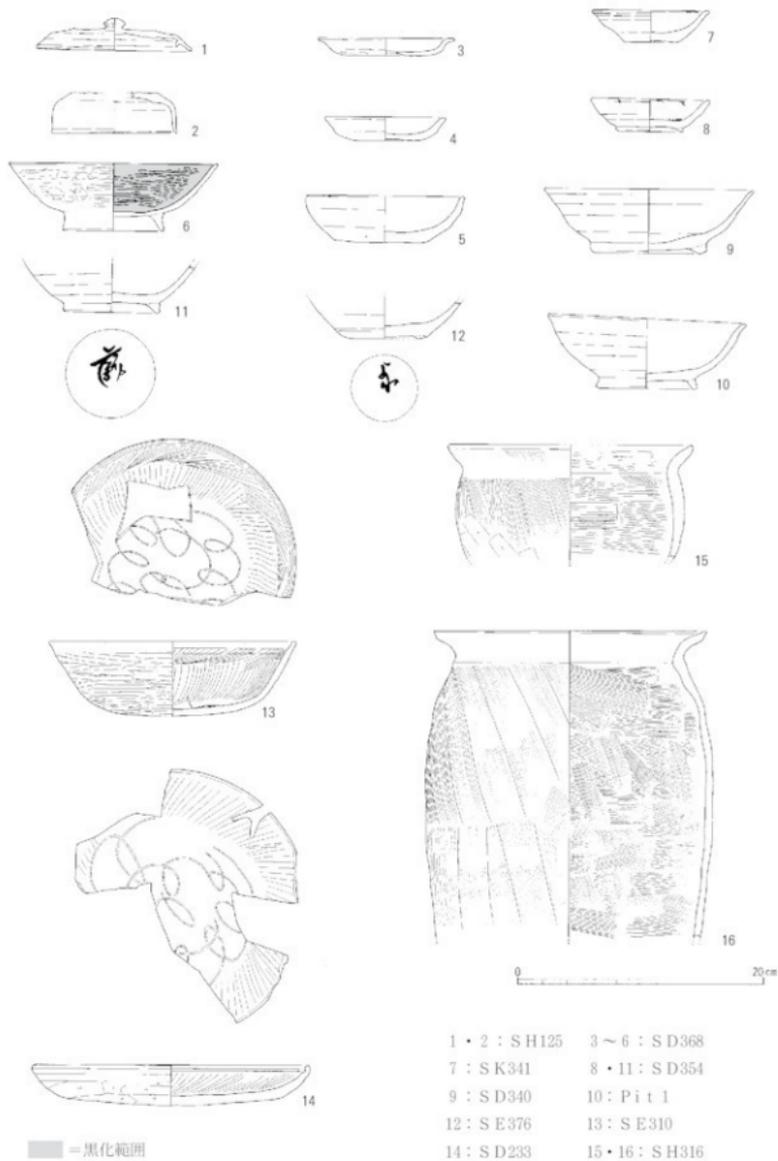
1と2は須恵器杯蓋で、1は擬宝珠様のつまみが貼付され、かえりの端部は接地しない。2は平らな天井部で、体部は天井部に対し、ほぼ垂直におり。13は土師器杯である。内面には放射状に2段と螺旋状の暗文があり、体部外面は横方向にミガキが、口縁部はヨコナデが施される。14は土師器皿で、内面は放射状と螺旋状の暗文がみられ、外面はヘラケズリが施される。15は土師器甕で、体部外面の上半は縦方向のハケ、下半は縦方向のケズリ、内面は横方向のハケが施される。16は土師器長胴甕で、頸部でややすぼまり、口縁部はつよく外反する。

中世前期

①地区の溝や井戸、土坑から山茶碗が数多く出土しているほか、他の地区からも山茶碗、土師器小皿・鍋などが一定量出土した。

3は土師器小皿で、広く平らな底部とつよく外反した口縁部からなり、底部外面にはユビオサエ、口縁部はヨコナデが施される。4・5は土師質土器(ロクロ土師器)皿である。5の体部は丸味を帯び、口縁部は直立する。6は黒色土器で、内面のみに黒化され、内外面ともにミガキが施される。

7の陶器小皿は糸切り痕が明瞭である。8の陶器小碗の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使われていた可能性が高い。9・10は山茶碗である。9は低く粗雑な高台に粉殻痕がみられる。10の体部は少し丸味を帯び、口縁部はゆるやかに外反する。また、底部外面に墨書された山茶碗も数点出土した。11と12は、そのうちの二点である。11は外面に花押が書かれ、高台の低い12の外面には「よね」という文字がみられる。



第5図 第7-1次調査出土遺物実測図(1:4)

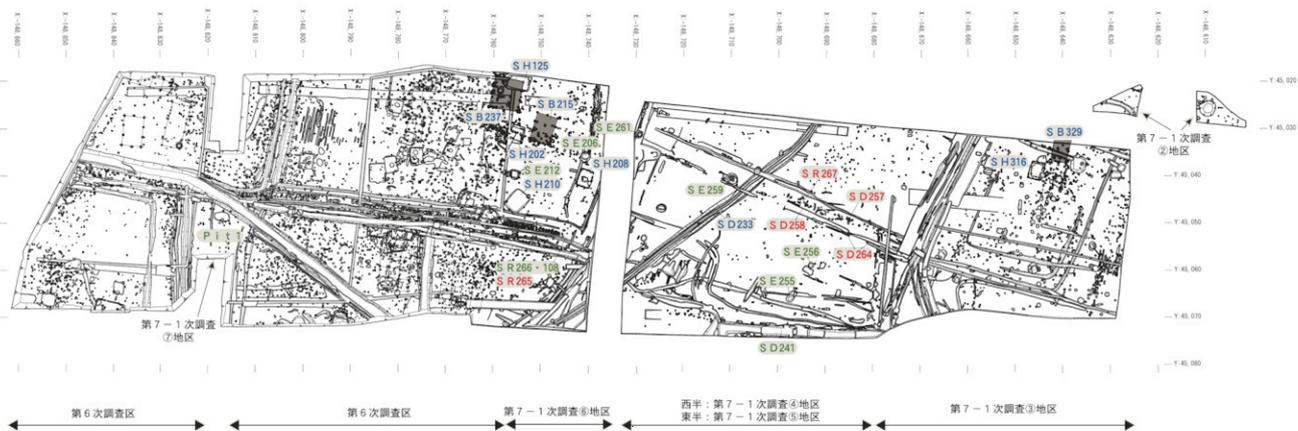


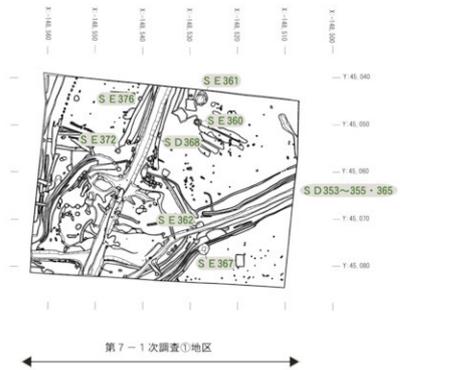
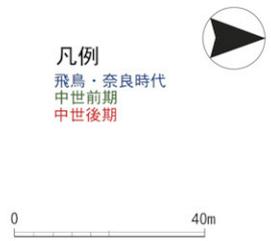
写真2 SH 316 カマド (南から)



写真4 S D 233 (北西から)



写真3 波板A (南西から)



第6図 第7-1次調査遺構平面図 (1:800)

3 木造赤坂遺跡第7-2次調査①地区

a 基本層序

工事車両侵入路にあたる幅5m×長さ90mの細長い調査区である。基本層序は表土、褐灰色シルト、灰黄褐色シルト（遺物包含層）、黒褐色シルト、黄橙色シルトである。遺構検出は、黄橙色シルト層上面で行った。この辺りは遺跡の最高所にあたり、狭い調査区ながら、古墳時代から近世にいたる多くの遺構を確認した。

b 遺構(第7図)

古墳時代

調査区北部を中心に土坑・溝を確認した。中央部では中期末頃の竪穴住居SH521を確認した。他にも焼土塊がみられる箇所があり、竪穴住居が存在した可能性があるが、明確にすることはできなかった。

平安時代後期

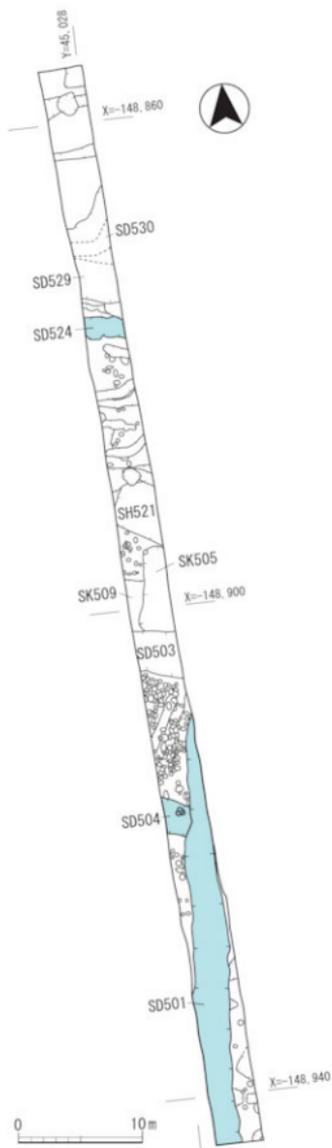
SD501(写真5) 調査区南部で確認した、北東-南西方向に走る大溝である。幅約2.5m、深さ約0.9mで、断面形態はやや緩いV字形である。埋土には大量の土器片を包含しており、土師質土器(ロクロ土師器)の台付皿・小皿が極めて多く出土している。他にも須恵器、緑釉・灰釉陶器、土師器の皿・椀・甕、黒色土器、製塩土器、瓦、土鏝、鉄製品、石製品など多岐にわたる。出土遺物から10世紀後半から11世紀前半頃に埋没したと考えられる。この溝の西側では濃密なビット群が存在するが建物等を確認するには至っていない。

SD504 ビット群の南側に位置し、SD501に直交することからみて、区画の溝と捉えられよう。

SD524 埋土、出土土器がSD501と相違ないことから、SD501に接続する溝と考えられる。



写真5 SD501とビット群(北東から)



第7図 第7-2次調査①地区遺構平面図(1:400)

c 出土遺物(第8図)

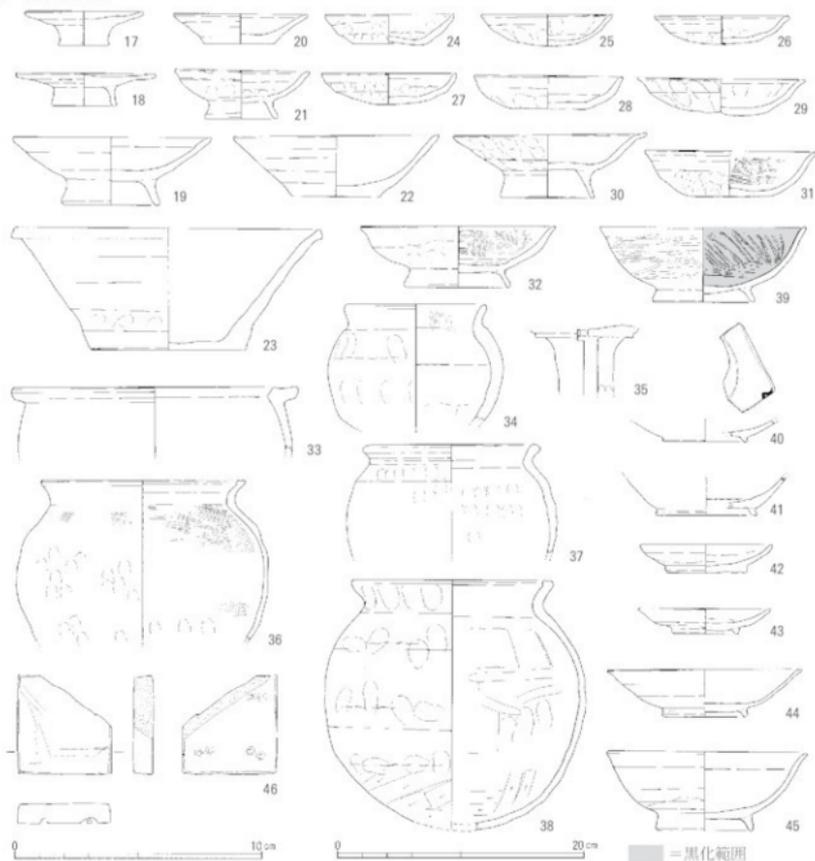
遺物は、縄文時代から近世のものまで見られる。特にSD501より出土した遺物は他の遺構より突出して多く、埋土には平安時代後期を中心とする遺物が多量に含まれていた。その主な遺物を下図に示した。

遺物には土師質土器皿・台付皿・椀・鉢(17～23)、土師器皿・台付皿・杯・高杯(脚柱部)・壺・甕・鍋(24～38)、黒色土器椀(39)がある。17は高台と

皿部とを連結成形しているいわゆる柱状高台付小皿である。18・19・21は土師質土器の台付皿で、21には輪花が7箇所見られる。30・31は土師器皿・台付皿で、31は内面に横方向の明瞭なハケメが見られる。33は清郷型鍋である。39は黒色土器椀で内面が黒化されている。

この他、緑釉陶器椀(40・41)や灰釉陶器皿・椀(42～45)、石帯(46)も出土した。石帯は、本調査区の北側に隣接する第6次調査区でも出土している。

17～46：SD501



第8図 第7～2次調査①地区出土遺物実測図(17～45は1:4、46は1:2)

4 木造赤坂遺跡第7-2次調査②地区

・井手ノ上遺跡第2次調査

a 基本層序

第7-2次調査②地区(以下、②地区と記述する)は木造赤坂遺跡の南端にあたり、この南に隣接して井手ノ上遺跡が存在する。①地区から続く黒褐色シルト層、黄褐色シルト層は、②地区北端で急激に落ち込み、②地区と井手ノ上遺跡が立地する沖積層下へ埋没する。②地区及び井手ノ上遺跡では、表土・床土下に数層の黄灰～褐灰色砂質シルト層が堆積し、その下層ににぶい黄褐色～褐色シルト層が堆積する。遺構は、これらの砂質シルト層上面、及びにぶい黄褐色～褐色シルト層上面から切り込んでおり、本来遺構面は複数面存在すると思われるが、今回の調査では全ての遺構検出をにぶい黄褐色～褐色シルト層上面で行った。

b 遺構(第9図)

縄文時代

この時代の遺構は、②地区北東部と井手ノ上遺跡南部の2ヶ所に集中しており、竪穴住居・竪穴状遺構・土坑等を確認した。竪穴住居内から炉跡・焼土等は、全く確認されなかった。出土遺物から大部分が晩期後葉のものであると考えられるが、SH36・SZ651等後期後葉にさかのぼるものも存在する。

SZ651(写真6) 土器が収まる最小限度の規模の掘形に深鉢土器が正立状態で設置されていた。土器の体部下半には4×7cmほどの穿孔が認められる。

SH628(写真7) 約3.8m×4.5mの楕円形の平面プランをもつ。柱穴と考えられる小ピットが同心円状に配置されていることから、住居と判断した。突帯文土器が出土した。

弥生時代

②地区の南部を中心に、中期の竪穴住居・土坑を確認した。

SH715(写真8) 調査区北西部で確認した。北東半を後世の溝に壊されており、全体の規模は不明である。南壁際で、細頸壺やく字形甕が床面からやや浮いた状態で出土した。

SK724 SH715で出土した土器群直下に掘られた東西約1.6m×南北約1.0mの土坑で、底から台付甕が出土した。



写真6 S Z 651 (西から)



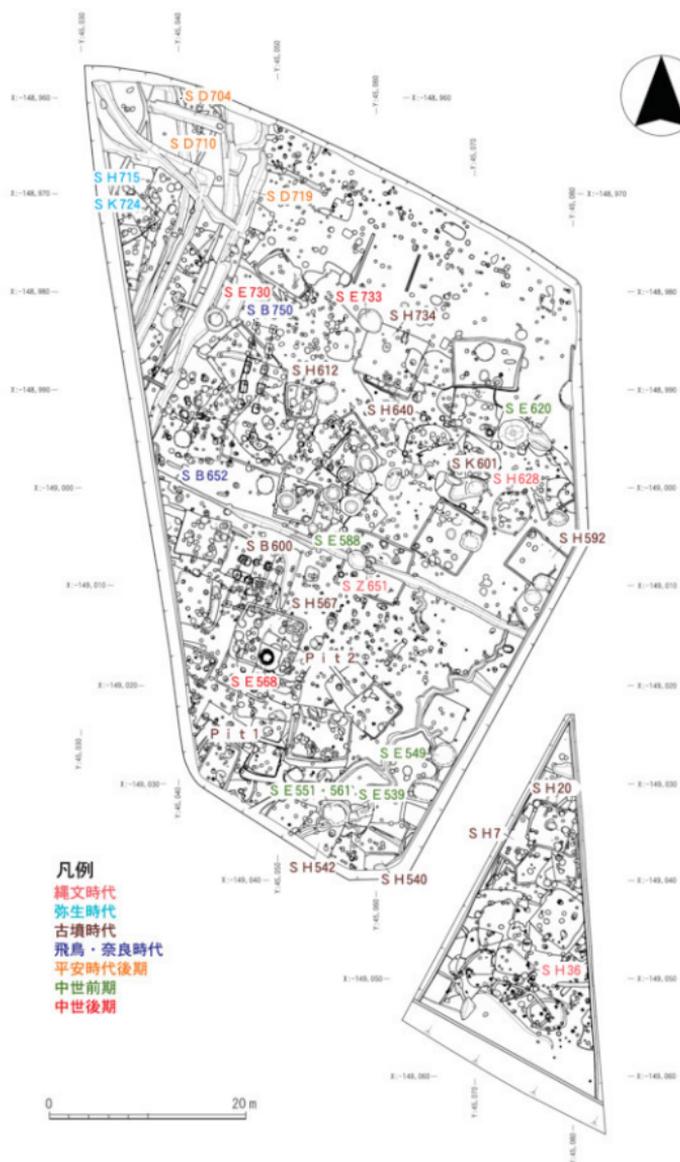
写真7 S H 628 (北西から)



写真8 S H 715遺物出土土状況(西から)



写真9 S H 640・734遺物出土状況(東から)



第9図 第7-2次調査②地区・井手ノ上遺跡遺構平面図(1:500)

古墳時代

②地区では、おびただしい数の竪穴住居の他、掘立柱建物・井戸・土坑を確認した。住居の存続時期の中心は、出土須恵器から陶邑編年^③のTK23型式からTK10型式併行期と考えられるが、前後半のものも数棟存在する。単独で存在する住居は稀で、多くは隣接して、あるいは同一地点で重複する。カマドは全体的に遺存状況が悪く、袖部が残っているものはごく僅かであるが、焼土の存在から大部分が北竈であったことが窺える。多くの遺物が出土しており、中には韓式系土器や初期須恵器も含まれる。

井手ノ上遺跡では重複が激しく、全体を把握することが困難であった。遺存状況が良好なものとしては、SH7・20が挙げられる程度である。

SH20 井手ノ上遺跡北部で確認したもので、一辺4.5mのほぼ正方形の竪穴住居である。住居際には壁周溝が巡り、貯蔵穴とみられるピットがある。

SH542 ②地区南端で確認されたもので、初期須恵器の蓋を含む古墳時代中期後半頃の多くの土器が一括して出土した。

SH640・734 (写真9) ②地区北部で確認した。重複関係からSH734が新しい。SH640は、南東辺のみ残存する。南辺では大量の炭化木材を確認している他、床面からは土器が一括して出土した。SH734は北壁中央にカマドを持ち、カマド内部には支脚に用いられた石が現位置のまま遺存していた。カマド周辺からは、数個体分の台付甕が潰れた状態で出土した。また埋土のフルイがけを行った結果、南半を中心に300個以上の白玉が出土した。

SH567 (写真10) ②地区南西部で確認した。東西約6.7m×南北約6.2mの長方形の平面プランをもつ。カマドは北壁中央に構築されており、壁周溝は後世の遺構に破壊されている南東部を除いて全周する。この住居埋没後、南東部にPit2 (写真11)が掘られており、ここから須恵器の椀形甕や土師器の甑・高杯などがまとまって出土した。

SB600 (写真13) 梁行3間(約4.2m)×桁行3間(約5.1m)の総柱建物である。柱間は、梁間が約1.4m等間、桁間が約1.7m等間である。

SK601 ②地区中央東側で確認した。多くの土器が出土しているが、焼成不良のものや穿孔のない器



写真10 SH567 (南から)



写真11 Pit2 遺物出土状況(北東から)



写真12 Pit1 遺物出土状況(東から)



写真13 SB600 (北から)

などが含まれていることから廃棄土坑の可能性がある。古墳時代後期初頭のものであろう。

飛鳥・奈良時代

S B 750(写真14) 梁行1間(4.7m)×桁行4間(4.1m)の掘立柱建物である。柱穴出土遺物は大部分が古墳時代のものであるが、これらは重複する竪穴住居遺物の混入と考えられる。その他の時期の遺物には暗文を施した土師器皿がある。

S B 652 梁行2間(4.2m)×桁行2間(4.2m)の掘立柱建物である。建物東面の柱筋をS B 750の西面にそそえて建てられていることから、同時期の建物と考えた。

平安時代後期

調査区北西部でL字に曲がる断面逆台形の溝S D 710を確認した。この溝の上層からは①地区のS D 501と同様に、土師質土器が大量に出土した。さらにS D 710の北側にはS D 704が、東側にはS D 719が、S D 710を囲うように巡り、埋土から平安時代後期の所産である土師器や灰軸陶器とともに、土師質土器が一定量出土した。したがって、この時期には同規模の溝が二重に存在していたのであろう。

中世

溝や井戸を確認した。井戸は、調査区全域で見られる。安全確保のため、ほとんどの井戸は約1mの深さで調査を止めている。そのため時期を明確にはできないものもあるが、埋没時期が12世紀後半～13世紀初頭のもの(S E 539・519・551・588・620等)と、15～16世紀代のもの(S E 568・730・733等)に大別される。また、湧水層である砂層まで掘り込んだ井戸と、井戸底が砂層まで達せず、粘土層中にあるものの二通り存在し、使用目的による違いを示している可能性がある。砂層まで達しているものは、井戸側に木材や石などを用いて丁寧に構築しているものが多く(S E 539・568(写真15)・620)、井戸底が粘土層中にあるものは素掘の傾向が見られる。一方、掘形の形状や井戸上部の土坑の存在から井戸側や水溜めなどが抜き取られた可能性のあるものも存在する。

c 出土遺物(第10～14図)

縄文時代(第10図47・48)

47は突帯上に刻み目が施されないのである。



写真14 S B 750 (北から)



写真15 S E 568断ち割り状況(北から)

後期後葉の無文深鉢形土器(48)は体部下方に穿孔が認められる。

弥生時代(第10図49・50)

受口状口縁細頸壺(49)は、口縁部に1条の凹線を施す。台付甕(50)はタテハケ後、肩部に櫛状工具による直線文を施す。口縁端部には刻み目を施す。

古墳時代

S H 540(第10図55) 韓式系土器である。甕もしくは鉢の類であろうか。外面は平行タタキ調整される。

S H 542(第11図57～63) 須恵器は有蓋高杯蓋

(57)・高杯脚部(58)・杯身(59)がある。57は、天井部に櫛状工具による二段の刺突列を施す。60～63は土師器高杯・壺で、61は体部穿孔小型壺である。S H 567 (第12図71～90) 須恵器には壺(71)・杯身(72・73)・甕(74)がある。71は、頸部をカキメ後、波状文を施す。73は底部外面2/3以上を手持ちでヘラケズリする。74は外面を格子タタキ調整し、内面の当て具痕をナゲ消す。土師器には壺(75・86)、高杯(76～84)、台付甕(85・87・88)がある。86はタテハケ後、肩部にヨコハケを施す。雲出川から安濃川流域にかけて顕著に分布する⁵⁾。89は滑石製紡錘車で、研磨後、側面に斜格子の線刻を施す。90は砥石。

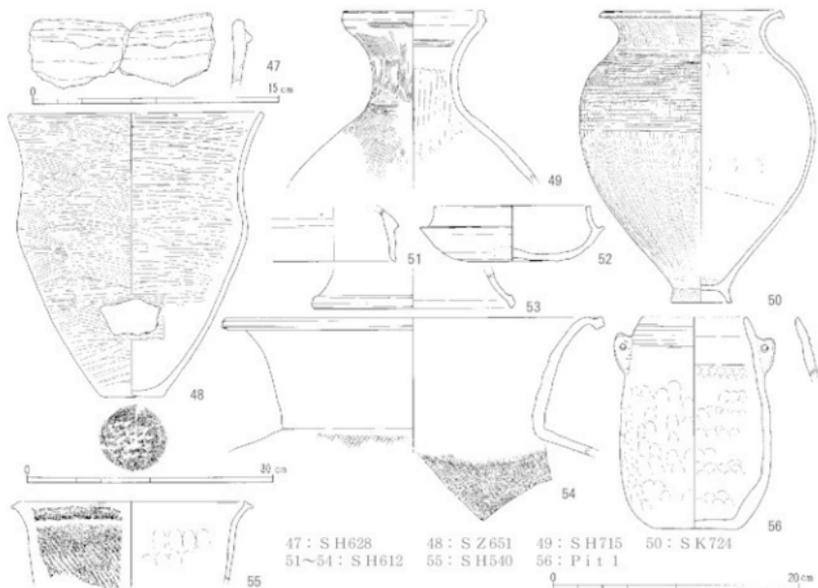
S H 592 (第13図91～93) 91は口縁端部をつまみ上げる土師器甕である。92は宇田型台付甕。韓式系土師の把手付鍋(93)は外面に施された格子タタキが底部にまで及び、内面をナゲ調整する。把手直下にヘラ描き沈線が2条見られる。

S H 612 (第10図51～54) 須恵器杯蓋(51)・杯身

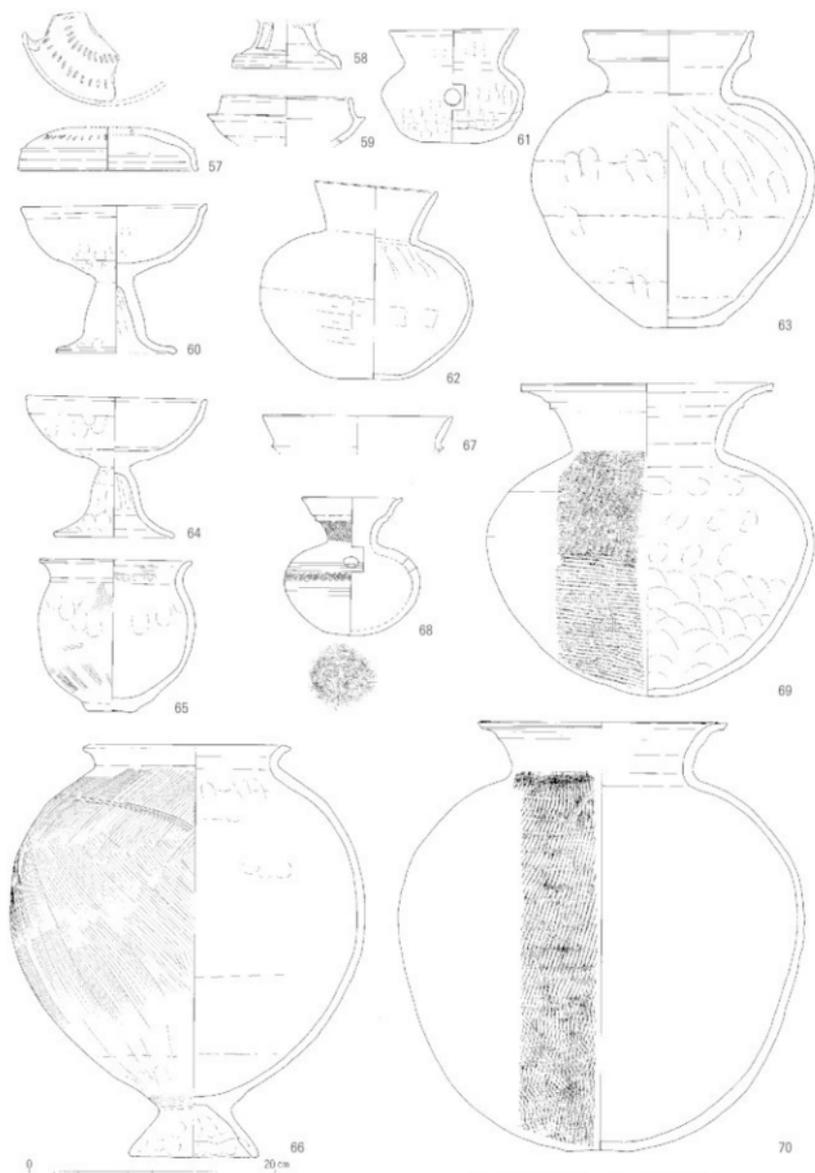
(52)・高杯(53)・甕(54)が出土した。54は、当道跡出土の他の須恵器と異なり、やや白っぽい色調を呈する。口頸部は外湾しながら立ち上がり、一度下方に屈曲した後、断面方形の端部に至る。外面は平行タタキ調整され、自然釉がかり、内面には同心円状の当て具痕が残る。

S H 640 (第11図64～70) 須恵器には無蓋高杯(67)・甕(68)・壺(69)・甕(70)がある。甕(68)は底部に「×」のヘラ記号が刻まれる。壺(69)は体部下半から底部を平行タタキ調整し、内面に無文の当て具痕が残る。底部近くにヘラ記号が刻まれる。甕(70)の外面は平行タタキ調整後に圓線を施し、内面の当て具痕を丁寧にナゲ消す。猿投窯産(東山111号窯式)の可能性が⁶⁾ある。土師器は椀状高杯(64)・小型平底甕(65)・宇田型台付甕(66)などがある。

S H 734 (第14図99～123) 須恵器は壺(100・101)のほか、把手付椀の口縁と思われるもの(99)も出土した。把手付椀(99)は凸帯下に波状文を施す。土師器は高杯(102～106)・壺(107)・台付甕(108～

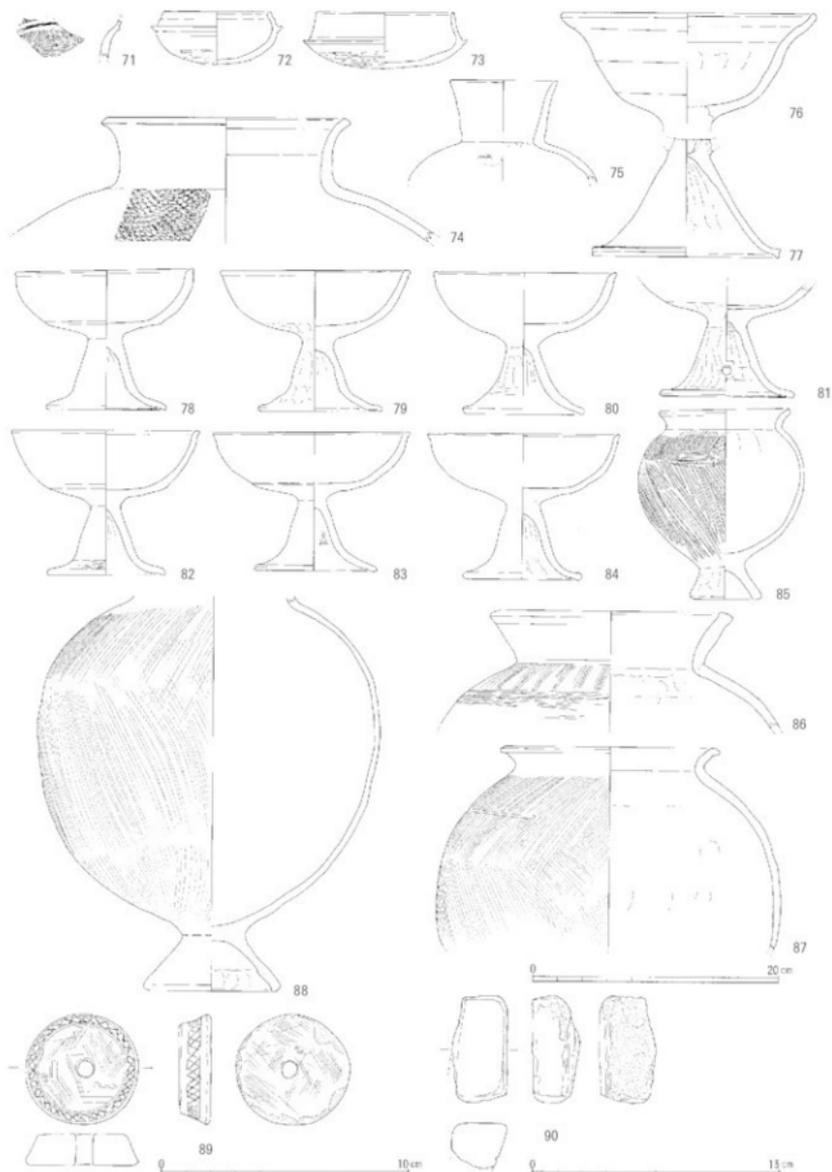


第10図 第7～2次調査②地区出土遺物実測図1 (47は1:3、48は1:6、49～56は1:4)

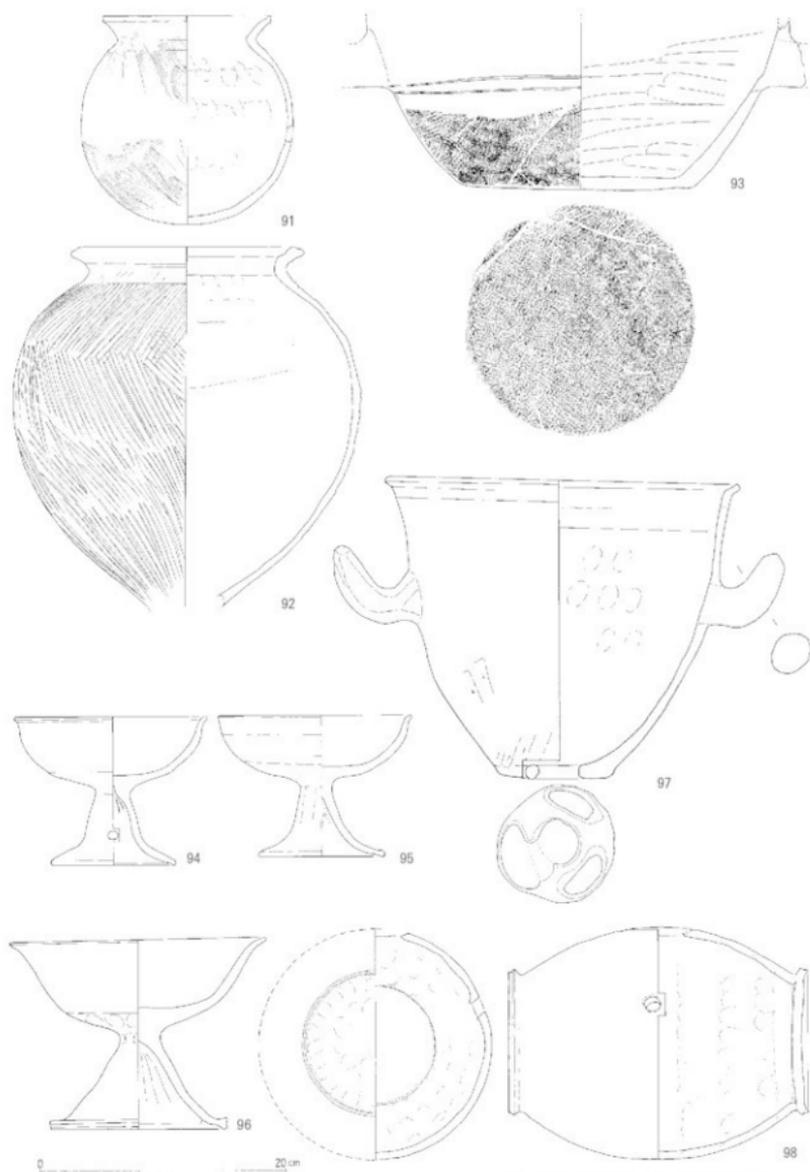


57~63: SH542 64~70: SH640

第11图 第7-2次調査②地区出土遺物実測図2(1:4)

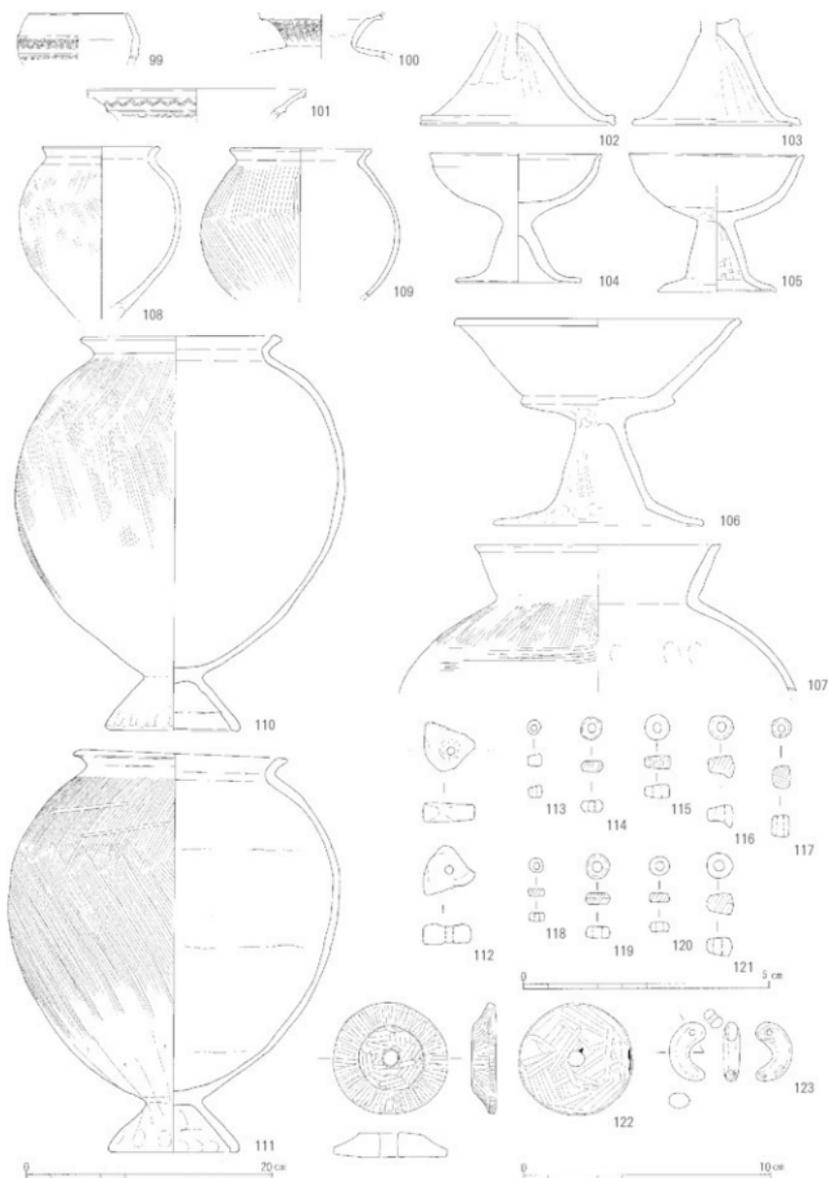


第12図 第7-2次調査②地区出土遺物実測図3 (71~88は1:4, 89は1:2, 90は1:3)



第13図 第7-2次調査②地区出土遺物実測図4(1:4)

91~93: SH592 94~98: Pit 2



第14図 第7-2次調査②地区出土遺物実測図5 (99~111は1:4、112~121は1:1、122-123は1:2)

111)が出土した。107は体部のタテハケ後、肩部にヨコハケを施す。86と同タイプのものである。113は緑色ガラス小玉。300個以上出土した白玉(114～121)は、その大部分がS H640と重複する南半から出土しており、大半がS H640に伴うもの可能性もある。122は石製紡錘車で丁寧に研磨される。123は勾玉。

ビット出土(第10図56(巻頭下段写真・写真12)、第13図94～98) 須恵器両耳付平底壺(56)は内外面とも指ナデされ、口縁部にカキメを施す。胎土・焼成が須恵器と明らかに異なることや、伽耶地域の陶質土器に類似した形態のものがあることなどから、陶質土器である可能性もある。須恵器樽形甕(98)、土師器高杯(94～96)・甕(97)は一括して出土した。97は底部に1+3の穿孔を有する。

5 まとめ

以下、調査成果を時代順に述べ、まとめとする。

縄文時代 木造赤坂遺跡では、これまでの調査で晩期を中心とした時期の遺物が数多く出土していた。今回の調査で、遺跡南端部にあたる第7-2次②地区、井手ノ上遺跡で竪穴住居や土坑などの遺構を確認できたことは大きな成果といえる。また、埋設土器(S Z 651)は後期後葉の所産であり、当遺跡の形成がこの時期まで遡ることが確実となった。

弥生時代 中期の竪穴住居を確認した。遺構・遺物の出土地点は、縄文時代の居住域とほぼ重複する。

古墳時代 第7-2次①・②地区、井手ノ上遺跡で中期後半～後期前半の濃密な竪穴住居群が確認された。第6次調査では調査区南部で当該期の遺構を確認したが、それより北側には遺構は存在していない。したがって、集落の北限は第6次調査区南部ということがいえよう。

今調査では初期須恵器・陶質土器の可能性のある須恵器・韓式系土器などを含む多くの土器が出土しており、中期後半～後期前半にかけての良好な資料が得られた。それに加え、勾玉・白玉・紡錘車といった石製品も出土しており、竪穴住居内で祭祀が行われたと考えられる。

飛鳥・奈良時代 第6次調査で確認した集落が、さらに北へ展開することを確認した。第7-2次②地

区では、L字形配置をとる独立柱建物を2棟確認したが、その性格は明らかにし難い。北側の集落との関係は、次年度の調査結果を待って検討したい。

平安時代後期 第7-2次①・②地区で確認した区画溝と考えられるS D501・524・710から土器が大量に出土したが、その中に占める土師質土器の割合が高いことが特筆される。当該時期の土器組成の中に占める土師質土器の比率は、伊勢では北部ほど高く、南部ほど低い傾向にあるとされる^⑧。そのなかでも、南勢地域にありながら、斎宮跡では土師質土器の占める割合が高い傾向にある。同様に、中勢地域にありながら高い比率で土師質土器が出土したことは、当遺跡と斎宮跡との間に何らかの関連性を窺わせる。古代末から中世にかけての当地については、木造荘の存在が知られている。木造荘は、伊勢平氏の平正度が、「斎宮寮助」として斎宮寮田が存在した木造の地を開発・支配したのが始まりであるとされており^⑨、土師質土器の占める高い割合は、こうしたことを背景としていた可能性が考えられる。

中世前期 今回確認された当該期の遺構は、調査区全域に及ぶが、大部分が溝や井戸等である。第7-1次⑤地区東端で、区画溝と考えられるS D241を抽出したが、建物跡などは確認されていない。第6次調査では、現木造集落に隣接する調査区東半を中心に、掘立柱建物とそれらを区画する溝が確認されており、この時期の居住域の中心は現集落域と重複することが推測される。また、第6次調査で不明確であった道路状遺構の詳細な構造を明らかにできたことは、大きな成果である。

中世後期 井戸や溝を第7-2次②地区で、道路状遺構を第7-1次④・⑥地区で確認したが、遺構密度は希薄で、遺物の出土も調査区全域に及ぶものの量的には非常に少ない。

註

① ② ③ 赤坂遺跡(第6次)。(『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財調査報告書 概報18』三重県埋蔵文化財センター 2007)

④ 近江俊秀「道路遺構の構造～板状四凸面を中心にして～」(『古代文化』第47巻第4号 1995)

⑤ 田辺昭三『新編大和』(角川書店 1981)

⑥ 伊藤裕隆「雲出島遺跡における古墳時代中後期の土師器」(『略説』Ⅱ 三重県埋蔵文化財センター 1995)

⑦ 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知埋蔵文化財センター 城ヶ台氏のご教示を得た。

⑧ 伊藤裕隆『Ⅱ 第131次調査』

(『史跡 斎宮跡 平成13年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2003)

⑨ 中野達平「久我家伊勢国木造荘と北高家について」

(『國學院院誌』97 1996)

Ⅲ 向山遺跡

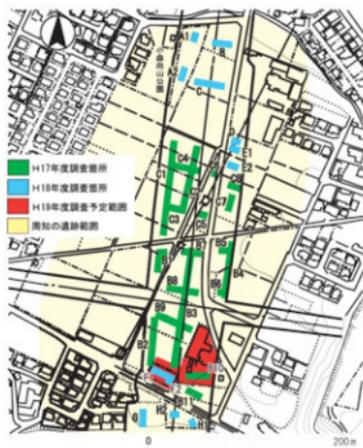
1 はじめに

向山遺跡は、津市高茶屋小森町字向山に所在し、雲出川左岸の台地南辺部に位置する。平成6年度に津市教育委員会が行った調査では、縄文時代から古墳時代の遺構・遺物が確認されている^①。平成17年度にも第2次調査を実施しており^②、今回はその続きとなる。

2 調査概要・結果

今年度の調査対象面積は14,300㎡で、調査面積は400㎡である。現地での調査は10月16日～20日に実施した。

調査は、昨年度のA～D地区の地区割りを使用せず、北から任意にA～Hのトレンチを設定した(第15図)。幅約2mのトレンチを重機掘削で行い、入力で検出・清掃作業、写真撮影・図化を行った。南部の竹藪では人力で幅1m、長さ5mのトレンチを掘削した。昨年度同様、表土直下で地山である橙色粘質土が確認されるトレンチが多く、遺構が存在していたとしても、すでに削平されていると考えられ



第15図 向山遺跡トレンチ位置図(1:5,000)

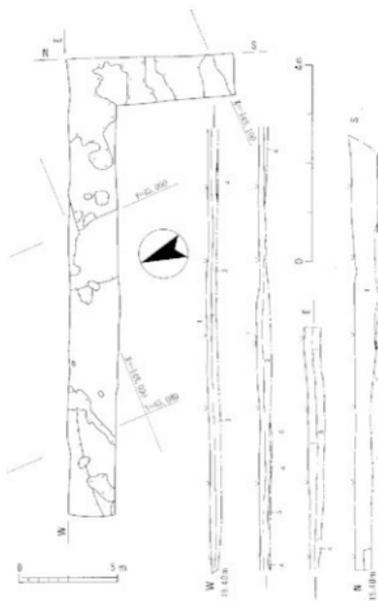
る。遺構が確認できたのは、昨年度に遺構が確認されたトレンチB3・B10に隣接するF1・F2トレンチのみで、溝4条が検出され、土師器・須恵器の小破片が出土した(第16図)。

以上の調査結果から、昨年度の結果と併せ約2,200㎡(第15図)について面的な発掘調査が必要であると判断した。

註

①『向山遺跡発掘調査報告書』(津市埋蔵文化財センター 2003)

②『Ⅳ 向山遺跡』(『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』三重県埋蔵文化財センター 2007)



- 1 バラス (御車場築き土)
- 2 埋戻し(0.000)黒褐色粘質土に地山土がブロック状に混入)
- 3 S D 1 埋戻し(T. 0.002) 黒褐色粘質土・土師器片混入)
- 4 地山(T. 0.004/4 褐色粘質土(地山))
- 5 埋戻し(T. 0.006/2 黒褐色粘質土に地山土が混入・炭化糞含む)
- 6 S D 2 埋戻し(T. 0.002/2 黒褐色粘質土に地山土が混入・須恵器片混入)
- 7 S D 3 埋戻し(T. 0.002/1 黒褐色粘質土・土師器片混入)

第16図 F1・F2トレンチ平面図(1:250)

・土層断面図(1:100)

IV 成瀬A遺跡・成瀬B遺跡・稲降遺跡

1 はじめに

一般国道23号(8-1工区)中勢道路建設事業に先立ち、平成18年11月13日～28日に津市河芸町三行字成瀬・北黒田字稲降に所在する3遺跡の調査を行った。以下、遺跡毎に概要を記述する。

2 成瀬A遺跡

当遺跡は三行集落の南東に位置し、遺跡の北側に田中川が東流している。北へ延びる2つの丘陵に挟まれた谷状地形(標高10～25m)に立地し、地目の多くは水田である。調査区は水田の区画に合わせて10箇所、東側丘陵の先端部に1箇所を設定し、計11箇所で行った。

調査の結果、谷状地形では遺構は確認できず、遺物は上層から陶器片(山茶椀など)が出土したが、流れ込みによる混入と考えられる。

丘陵端部では表土を除去すると地山になり、遺構・遺物共に確認されなかった。

3 成瀬B遺跡

当遺跡は成瀬A遺跡の南西、標高約45mの丘陵上に立地している。地目は山林である。北へ延びる丘陵にLトレンチ、東へ延びる丘陵にMトレンチを設定し、2箇所で行った。

Lトレンチの調査前の地形は急傾斜と平坦面が連続していたが、土層観察の結果、本来緩斜面だった所を削って平坦地を形成したものと想定される。しかしその時期は不明である。遺構・遺物共に確認されなかった。

Mトレンチでは表土直下で地山が確認された。表土から須恵器が出土したのみで、遺構は確認されなかった。

4 稲降遺跡

当遺跡は、弥尼布理(やぶふり)社の北西、現時点で中勢バイパスと国道306号線が合流する交差点の北側に位置し、地目は水田・荒地である。調査区

は水田部分に1箇所、その南の駐車場に2箇所を設定し、計3箇所で行った。

今回の調査結果では、いずれも表土(またはパラス)直下で地山が確認され、遺構・遺物共に確認されなかった。



第17図 成瀬A遺跡・成瀬B遺跡・稲降遺跡

調査区位置図(1:50,000)

報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろまいごうぶんかざいはつかつちょうきがいほうじゅうきゅう						
書名	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報19						
副書名							
巻次							
シリーズ名	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報						
シリーズ番号	19						
編著者名	上村安生 浅尾太 原田恵理子 石井康晴 水谷豊 角正芳浩 才木薫 豊田祥三						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町503 TEL 0596-52-1732						
発行年月日	2007年(平成19年)9月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こつくりあさかさいせき 木造赤坂遺跡	みまけんつちつくりちよう 三重県津市木造町	201 b210	34° 39° 19"	136° 29° 41"	20060517 ～ 20070312	11,500	一般国道23号中勢道路建設
いでてうえいせき 井手ノ上遺跡	みまけんつちつくりちよう 三重県津市木造町	201 b212	34° 39° 7"	136° 29° 40"	20060517 ～ 20070312	370	一般国道23号中勢道路建設
むかひやまといせき 向山遺跡	みまけんつちつくりちよう 三重県津市高菜塚小塚町	201 a707	34° 39° 36"	136° 29° 36"	20061016 ～ 20061023	400	一般国道23号中勢道路建設
なりゅういせき 成瀬A遺跡	みまけんつちつくりちよう 三重県津市河芸町三行	201 c15	34°	136°	20061113	600	一般国道23号中勢道路建設
なりゅういせき 成瀬B遺跡	みまけんつちつくりちよう 三重県津市河芸町三行	201 c49	47°	31°	～	140	
ふらたせき 稲降遺跡	みまけんつちつくりちよう 三重県津市河芸町北黒田	201 c46	41°	19°	20061128	260	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
木造赤坂遺跡	集落跡	縄文～近世	惣六住居 間柱建物 土坑 井戸 溝 遺跡跡 等		縄文土器(埴原、晩期) 弥生土器 土師器 須恵器 韓式系土器 埴輪 灰輪陶器 緑釉 陶器 黒色土器 製土器 山菜輪(黒色 有) 瓦器 石版 舟皿 弥生前期 石製品 鉄製品 木製品等		
井手ノ上遺跡	集落跡	縄文～鎌倉	惣六住居 土坑 溝		縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 山菜 輪 石版 白土 磁石		
向山遺跡	集落跡	縄文 古墳	溝		縄文土器 土師器 須恵器		
成瀬A・B遺跡 稲降遺跡	遺物散布地	古墳 鎌倉	特になし		土師器 須恵器 陶器		
要約	木造赤坂遺跡	遺跡は、豊田川下流右岸の段丘頂上、及び河原部に位置する。縄文後～晩期・弥生中期・古墳時代前期前半から後葉前半の集落跡を南部の調査区で確認した。特に、古墳時代中葉末から後葉初期を主とする惣六住居跡は強く重視している。北部の調査区では、縄文時代から奈良時代の惣六住居や、鎌倉時代から室町時代の遺跡の跡を確認した。その他、全体の近代や中世の溝・井戸を数多く確認した。					
	井手ノ上遺跡	遺跡は、豊田川下流右岸の段丘頂上に位置する。縄文時代後～晩期の惣六住居、弥生時代中葉の土坑、惣六住居、古墳時代前期から後葉にかけての惣六住居・土坑等を確認した。多数の惣六住居が検出されたが、その多くが古墳時代中葉末から後葉初期のもので強く重視している。					
	向山遺跡	遺跡は、豊田川右岸の段丘頂上に位置する。調査地の南部で溝を4条検出し、縄文土器・須恵器・土師器の小破片が出土した。					
	成瀬A・B遺跡 稲降遺跡	遺跡は、中勢道路と国道308号線が合流する北側に位置し、百瀬から舟木田にかけて立地している。調査の結果、一部で須恵器・土師器・陶器が出土したが、いずれも残れ込みによるものと考えられる。遺構は確認されなかった。					

一般国道 23 号中勢道路

埋蔵文化財発掘調査概報 19

2007 (平成 19 年) 9 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 東海印刷株式会社

